



ルーヴル作品はバラがモチーフ。

9 月16日から〈ペロタン東京〉で、菊をモチーフにした個展『夢路 Dream Road』を開く

フランスのアーティスト、ジャン＝ミシェル・オトニエル。〈弘前れんが倉庫美術館〉でも9月22日までのオープニング展『Thank you Memory —醸造から創造へ—』で、りんごをモチーフにした作品を長期展示する予定だ(※コロナ禍で設置が遅れている)。日本は何度も訪れている特別なところだという彼に聞いた。

Q 『夢路』というタイトルに込めた思いは？

これは白い菊の品種名で、「夢を見る」「夢で愛する人と逢う」ことを表す。僕は見る人に幸福な気持ちを感じてもらいたくてアートを制作しているのだけれど、背景にはそんな思いもある。「夢路」という言葉は1年前に決めたものだけれど、今の状況を考えるとさらなる意味が付け加えられたような気がするね。

Q 今回のモチーフになった菊は日本では長寿のシンボルです。

花には文化によってさまざまな意味が込められていて、フランスでは愛の象徴としてバラがよく詩や小説に登場する。だからルーヴル美術館にはバラをモチーフにした作品を設置したんだ。

ART

日本の菊をアートにしたオトニエルの個展へ。

日本の自然との向き合い方に興味を持つオトニエル。最新個展では、菊の意外な美を発見できます。

ジャン＝ミシェル・オトニエル 1964年フランス出身。初期には硫黄や蠟を、93年からはガラスを用いた作品を制作。日本でも〈毛利庭園〉や〈ハラ・ミュージアム・アーク〉に恒久設置作品がある。

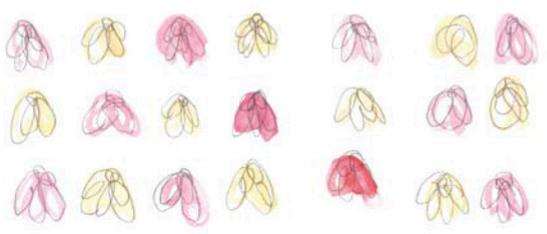


2



1 《Kiku-kokushokuiro (black)》。金箔に黒インクで描いた。2 《Kiku - Hiwamoegijiro (Siskin sprout yellow)》2019年。優美な色の名前も日本の感性を思わせる。3 準備素描。ガラスによる菊の花が整然と並ぶイメージ。4 日本の菊祭りでおトニエルが撮影した写真。花がグリッド状に浮かぶ。5 《Kiku - Hiwamoegijiro (Siskin sprout yellow)》2019年。菊にはこんな緑色のものもある。

© Jean-Michel Othoniel / JASPAR, Tokyo 2020  
Photo: Claire Dorn / Courtesy of the artist and Perrotin



Chrysanthemum

3

ミニマル・アートみたいだ!



4



5

『夢路 Dream Road』〈ペロタン東京〉東京都港区六本木6-6-9六本木ピラミッドビル1F ☎03-6721-0687。9月16日～10月24日。11時～17時。日・月曜日。https://www.perrotin.com/ 〈弘前れんが倉庫美術館〉での展示はhttps://www.hirosaki-moca.jpを。

Q 近年ではガラスを使うことが多いですね。  
ガラスは永久的な素材だけれど、すぐに割れてしまうものもある。扱いに注意が必要だから緊張感が生まれる。僕の作品ではこれに限らず、観客が映り込むことで作品に取り込まれるような感覚も味わえる。

Q 黒インクによるドローイングは日本の書道も連想させます。  
動きやエネルギーといったコンセプトを表現している。ただし、日本の書道には起点と終点があるけれどこの作品には終わりが無い。無限に続くものなんだ。

Q 今回は作品をグリッド状に並べるそうですね。  
以前日本の菊祭りでも菊を格子状に並べているのを見てとても新鮮に感じた。まるでミニマル・アートのようだったんだ。日本ではアートだけでなく食や住居などでも自然との接点が随所に残っている。自然に対してヨーロッパとは違う独特の見方がある、興味がつきない。庭の作り方でも日本の庭は「見る庭」でフランスのは「歩く庭」だという気がする。わざと小さな木を植えて遠近法の錯覚で広く見せる手法なども面白くて、いつまでも見たいられるね。